

悲しみ寄り添い 臨床宗教師の実践

心のケアに当たる宗教者の専門職「臨床宗教師」が増えている。全国で初めて養成講座を創設した東北大に続いて、平成26年度からは龍谷大（京都市下京区）でも始まり、今年度、11人が研修を終えた。東日本大震災の被災地や医療現場などで約140時間の実習を積んでおり、命や死の苦悩を和らげる「即戦力」となることが期待される。

（小野木康雄、写真も）

東北の被災者は

昨年6月3日、宮城県南三陸町。仮設住宅の敷地にある集会所で、龍谷大学大学院で臨床宗教師研修を受講している学生が、被災者らと「お茶っこ」を開いた。近所同士が集まり、お茶を飲みながら世間話をする東北地方の習慣にヒントを得た交流会だ。

ケーキを食べ、打ち解けた雰囲気の中で談笑するうちに、参加した被災者は「心の痛み」をほつりほつりと語りはじめた。70代の女性は「運転免許の更新にも行けない」と話し、夫が津波にのまれて行方

龍谷大の臨床宗教師研修では、東日本大震災の津波被害に遭った防災対策庁舎で追悼法要も営んだ
—平成27年6月、宮城県南三陸町



傾聴の記録検討

不明のままだと打ち明けた。新潟県出身で平成16年の中越地震、19年の中部地震を経験した、臨床宗教師研修の受講生、西脇大成さん（25）は「東北には、自分の想像と容量を超える苦悩があった」と振り返る。自分の死生観と向き合えなければ、相手に寄り添うことができないと痛感させられたという。

受講生らは、津波で町職員ら43人が犠牲になった南三陸町防災対策庁舎で追悼法要も営み、同僚を亡くした元職員の女性から当時の体験談を聞いた。

臨床宗教師 苦悩や悲嘆を抱える被災者やがん患者らの心のケアに当たる宗教者。相手の価値観を尊重し、布教や宗教勧誘を行わない。欧米の「チャプレン」に対応する専門家として、東日本大震災を機に東北大が平成24年度、龍谷大が26年度にそれぞれ大学院で養成講座を設けた。修了者は東北大のべ126人、龍谷大25人で、宗教は仏教やキリスト教、神道など多岐にわたる。

答えを出さず、共に考え続けることが問われる」と話す。

実習では「会話記録検討」も繰り返した。実際に傾聴したときの様子を思い出して台本に書き、仲間とともにロールプレイで再現するのだ。適切なケアだったかどうかを客観的に振り返ることで、次に生かすという。

自殺対策でも

臨床宗教師が活躍する場は、被災地に限らない。

1月21日、11人の修了式に合わせ開かれたシンポジウムでは、京都府福祉・援護課の職員が講演。3月に自死遺族の孤立を防ぐための臨時のカフェを開き、臨床宗教師の協力を得ることを明らかにした。大辻忍・自殺対策推進担当課長は「悩みを抱える人の中には、宗教的な話を聞きたいという希望もある。勧誘をせず、宗教・宗派を超えて心のケアに当たる臨床宗教師の特長を生かしてほしい」と期待する。

龍谷大がモデルとした東北大の臨床宗教師研修では、修了したのべ126人のうち約3分の1が、主に医療・福祉の現場で活動している。東北大の谷山洋三准教授（臨床死生学）は「医療・福祉の分野には、医師や看護師などスタッフに対するケアのニーズもある」と指摘。両大学以外にも臨床宗教師の養成を始めた大学があることから、今後は各地の修了者同士の連携や、フォローアップ研修の充実を図るとしている。



臨床宗教師研修を終えて修了証を授けられる学生僧侶。1月21日、京都市下京区の龍谷大